
ごめんなさいの気持ち (CLANNAD)

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「めんなさいの気持ち」(CLANNAD)

【Zマーク】

Z0507BA

【作者名】

如月奏

【あらすじ】

友だちと公園で野球をしていたぼくたち。でも、突然雨が降り
出して……。

Part 1 (前書き)

本作は「CLANNAD」の一次創作です。ゲーム版のあるHPソードを基にして執筆しているので、アニメしか見たことがない方はネタバレにご注意ください。

友だちと公園で野球をした、その帰り道のことだった。一緒に連れてきていたペットの子犬の姿が見えなくなってしまったんだ。空が暗くなってきて、雨まで降り始めた。だから、ぼくは急いで家まで走り出したんだ。でも、それが全ての原因だった。一応、近所の野球チームでは一番を任せているし、ぼくは足が速い方だと思つ。だから、子犬はぼくの足についてくることができなかつたんだ。気づいた時には、もう遅かった。

「おーい、どこにいつたんだよー」

ぼくは大きな声を張り上げながら、もと来た道を引き返した。きっとすぐ近くにいるはずだ。そう信じて、引き返した。でも、子犬はどこにもいなかつた。そのまま歩いていると、近所の高校の生徒たちと何度もすれ違つて、ぼくは高校の近くまで戻ってきたことに気づいた。もうどうしていいか分からなくなつてしまつていた。

そんな時だつた。

「どうしたんですか？」

女の子の声が聞こえたんだ。ぼくは声のする方を振り向いた。背はぼくより少し上ぐらい。でも、見上げる程の高さではなかつた。

「……」

ぼくは何も言わずに、ただそのお姉ちゃんの目を見つめた。心配そうな表情を浮かべているお姉ちゃんは、傘もわざわざに立つていた。もうびしょ濡れだつた。

「あ……これ、使いますか？」

お姉ちゃんはそう言つと、鞄から折りたたみの傘を取り出し、ぼくに差し出してくれた。

「持つていたのに、さすの忘れてました。えへへ……」

お姉ちゃんはちょっとだけ悲しそうに笑つた。ぼくはどう返事したらいいか、分からなかつた。だから、そのまま黙つていた。

「え、えっと……傘がなくて困っているのではないか？」

戸惑いながら囁つお姉ちゃん。気づいた時には、ぼくは静かに頷いていた。

「ぼくのペットの犬がいなくなっちゃったの。だからここにいるか分からなくて、探して回っていたんだけど……」

「…………そうでしたか……」

お姉ちゃんはそう囁つと、ぼくに傘をぐいと押し付けて、優しく笑つた。

「探しましょ。近くにいるんですよね」

「えつと……たぶん……」

ここで、自分で探すよと言えばよかったです。でも、結局ぼくはお姉ちゃんの優しさにすがつてしまつた。

「お願ひ

「はい！」

お姉ちゃんの元気な声が、胸を少しだけチクチクした。それからしばらく一人で校門の近くを探して回つたけれども、やつぱり見つけないことができなかつた。すると、お姉ちゃんはぼくの一歩前に出て、「もしかしたら、もつと遠くまで行つてるかもしません。探してくるので、このあたりを引き続き探していくださー」と言うと、そのまま走つて行つてしまつた。傘はぼくの手元にあるままなのに。

それからぼくは、お姉ちゃんに言られた通り、校門からあまり離れないようにしながら、子犬の名前を呼んだ。でも、聞こえるのは雨の音だけ。少し前からさらに雨脚が強くなってきたような気さえする。ぼくは途方に暮れてしまい、お姉ちゃんが貸してくれた傘をさしたまま、校門の近くでしゃがみ込んでしまつた。すると、一人の男の子がぼくの前を走つていいくのが見えた。たぶん、お姉ちゃんと同じ高校の制服だ。でも、まるで周りのものが何も見えていないかのような、そんな感じだつた。

誰かを探しているんだろうか。それはぼくだって同じ。早く見つけ出してあげないと。ぼくはまた立ち上がり、近くをウロウロし始めた。

またじばりくして、背後に足音が聞こえた。

「お前が探してるのはこれか？」

先ほどのお兄ちゃんだった。その両手には、びしょ濡れになつた子犬が一匹。探していたぼくの子犬だった。

「あ……」

お兄ちゃんはぼくの手に子犬を持たせてくれた。ぼくは子犬をしつかりと抱きながら、

「よかつた。どこにいたの」

と聞いた。お兄ちゃんは無愛想な表情を浮かべながら、向こう側の塀のあたりを指さした。そして、そのまま歩き始めたんだ。

「あ、待って」

ぼくはそのお兄ちゃんを呼び止めた。まだお姉ちゃんが戻ってきていない。そのことが気がかりだつた。でも、彼はそのまま歩みを止めなかつた。ぼくは構わず口を開いた。

「お姉ちゃん知らない？」

すると、お兄ちゃんは足を止めた。そして、すぐに振り返つて、ぼくの瞳をじつと見つめた。

「誰のことだ」

「お姉ちゃん。こいつ探すの、手伝ってくれてるの」

「お前の姉貴か？」

ぼくは首を振つた。

「知らない人。でも、一緒に探してくれるつて……」

「制服は着ていたか」

お兄ちゃんはぼくの方に少しだけ寄つて聞いた。なんだかちょっと怖そうな人だつたから思わずこう言つてしまつた。

「う、うん」

「どうしたに行った?」

「うーん……」

やうじえぱどいまで探しに行つてこのだらけ。

「えつと……わ、分からなー……」

ぼくが指さすと、お兄ちゃんは

「やうか……」

とだけ言つて、すぐそばまで来て、ぼくの頭の上にぽんと手を置いた。

「お前は先に帰つてい。このままだとお前もやこつも風邪をひく」

「……」

ぼくが黙つてこると、お兄ちゃんは

「礼なら俺が伝えておく。だから、わざと帰れ。……たぶん、お前が風邪ひいたら、あいつもと心配するだろつか」

と言つて、ぼくの背中を押した。

「え、えつと……う、うん……」

結局ぼくは、お兄ちゃんの言葉に従つて、家まで戻つた。本当にそれでよかつたんだろうか。もし、お兄ちゃんがお姉ちゃんを見つけることができなかつたら……。絶え間なく聞こえ続ける雨音が、ぼくを不安にさせた。

そして、ぼくはまた家を飛び出した。お母さんが

「どこに行くの!」

と叫うのも聞かず、飛び出した。お姉ちゃんが貸してくれた傘を片手に、ただがむしゃらに走つた。血濁だつたはずの足が、今はすくなく遅いような気がした。でも、ただ走るしかなかつたんだ。

校門の前に着くと、お姉ちゃんがいた。びしょ濡れになりながらも、懸命に探してくれていたんだと思う。お姉ちゃんの表情には疲れが見て取れた。

「あ、お前」

お兄ちゃんの声には答へず、走つてお姉ちゃんのやばに寄つた。

「「」ねん……」

「こいんですよ」

お姉ちゃんはやう言つて、ぼくの頭を撫でてくれた。

「それより、子犬さんは元氣ですか？ 風邪とかひいてないですか？」

「う、うん……それより……」

お姉ちゃんこそ大丈夫？ やう言おつとした。でも、それはお兄ちゃんが口を塞いでしまったので、お姉ちゃんには届かなかつた。

「い、これ、返すよ」

ぼくはお兄ちゃんの手をのばると、お姉ちゃんの手に傘を握らせたあげた。

「わざわざありがと、い、わ、こまわ、……」

お姉ちゃんはやう言つて、うつうつと笑つた。少しだけ顔が赤い。ひょっこり……。

「ああ、お前はやつれと歸れ。渡すものも渡しちだろ」

「え、えつと、い、うん……」

お兄ちゃんに促されるようにぼくは頷いた。そして……。

「ありがと、お姉ちゃん……」

やう言つて、ぼくは駆け出した。やつれよつ……やつれたらここんだろ？ お姉ちゃんにすぐ悪こじをしかやつた。罪悪感だけが、ぼくの心の中に広がつていた。

Part 1 (後書き)

Part 3まであります。主人公の男の子は小学生ですが、読みやすさのため、地の文では漢字で記しています。

ぶっちゃけ、こんな重い話じゃないよといつ方もいらっしゃるかもしれません、一応本作ではこんな感じで進めていきます。

次の投稿は1月9日ぐらしを目標にしてます。

家の前まで戻つてくれると、傘をむしてあたりをキョロキョロ見回している姉貴の姿があつた。今日も吹奏楽部の練習が遅くまであって、ちょうど先ほど帰つたばかりなんだろうか。まだ中学校の制服を着たままだつた。

「あ……」

姉貴はぼくを見つけると、声を漏らした。

「……どう……行つていたの？」

「えつと……ちょっと忘れ物があつて……」

ぼくは嘘をついた。でも、姉貴には見ぬかれていたようだつた。

「何を隠しているの？」

丸い瞳は、ぼくの目を捉えてずっとそのまま。ぼくもそのまま姉貴の目を見つめ続けたけれども、結局ぼくの方が折れてしまつた。

「あのね……」

それからぼくは、今日あつたことを洗いざらいに話した。子犬とはぐれてしまつて、探して回つたこと。見知らぬお姉ちゃんに探すのを手伝つてもらつたこと。結局子犬は通りすがりのお兄ちゃんが見つけてくれたこと。お兄ちゃんに促されて、ぼくはお姉ちゃんが戻つてくるのも待たずに帰つてしまつたこと。そして……。

「なるほど……それで、さつきはその子と会つてきたわけね」

「う、うん……。でも、もう一度会つて、ちゃんと謝りたい。ぼくが探してもううのをお願いしたのに……それなのに、勝手に帰つてしまつたんだよ……」

「……」

姉貴はぼくを家の中にいれながら、タオルで自分の髪を拭いた。

「あなたの気持ちは分かつたわ。でも、また会える保証はあるの？
まさか校門前で待ち伏せとか？」

「しないしない。……でも、考えてみればそうだよなあ……」

姉貴の言つことはもつともだつた。ぼくがお姉ちゃんについて知つてゐる情報はただ一つ。あの高校の一 生徒であるといひことだけなのだから。

「……まあ、大して大きな町じゃないんだし、偶然また出会えるかもしれないけどね。その時まで……今の気持ちを忘れないようにね」

「うん……分かった……絶対に忘れないよ」

姉貴は小さく頷いて、ぼくの頭を撫でてくれた。

「さつさと着替えてしまいなさい。そんなびしょ濡れだと、あんたも風邪引いちやうわよ」

「分かった」

外はまだ雨音が聞こえ続けていたけれども、先ほどまでより少しだけ小さくなつた気がした。

翌日は、昨日の大降りが嘘のように、心地よく晴れていた。ぼくはまたお姉ちゃんに出会えるのではないかと淡い期待を抱きつつ、町に駆けていった。道の隅にできている水たまりを避けながら、ぼくは昨日走った道をまた行く。

しばらくして、ぼくは角のところで誰かと頭をぶつけてしまった。強烈な痛みとともに、ぼくは後方に飛ばされた。相手もまた同じようだつた。

「イタタ……」

頭をさすりながら前を見ると、女人が一人いた。年齢は分からぬが、かなり若そうな感じだ。そして……。

昨日のお姉ちゃんの面影があつた。

「「めんなさい！ だ、大丈夫ですか？」

その女人人は、ぼくの前に手を差し出していた。ぼくはその手を掴みながら答えた。

「うん、大丈夫」

その矢先に、女人の後方から、大量のパンを加えて叫びながら走つてくる変質者が現れた。

「うわ……もしかして、追われている……感じで……すか」

よく見ると、女人の目には薄つすらと涙が浮かんでいた。これはかなりの緊急事態なのではないだろうか。ぼくは女人の手を引いて走り始めた。しかし、女人はその場から動こうとしなかった。

「はあはあ……今日はいつになく足が速い……」

「また……取り乱してしまいましたね……」

パンを飲み込んで喉に詰ませかけている男の人の背中をさすりながら、女人人はぼくの方を向いた。

「えつと……その人は……」

ぼくはためらいながらも尋ねてみた。すると、あまりにも意外な答えが返ってきた。

「わたしの夫の秋生さんです」

「え……えええええ！」

一重の意味で驚かされた。まず夫がいたということが一つ。そして、雰囲氣的に真逆な感じの人が夫だったといふことがもう一つ。

「ふう……危うくこのまま窒息死するところだつた……」

「パンもお酒と同じです。少しずつ食べないと、ダメですよ」味わいに関する意味か、生死に関する意味かは気にしないでおこう。

「あ、あの……」

「あん？ なんだこいつは？」

「あ、えつとですね……さつきぶつかつてしまつたんです……」

そう言つて女人人はぼくの方に向かつて頭を下げた。

「ほつ……そいつは迷惑かけたな。それじゃ、パンをくれてやる。店に来な」

「え？ あ……うん……」

何が何やら分からぬまま、ぼくは一人のあとをついていくことになった。しばらく歩くと、「古河パン」と標識の掲げられた店の

前に辿り着いた。

「あ……」

ここで、予想外な人物と遭遇することとなつた。そう、昨日子犬を見つけてくれたお兄ちゃんだ。

Part 2 (後書き)

なぜにオリキャラが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507ba/>

ごめんなさいの気持ち (CLANNAD)

2012年1月8日21時46分発行